

第10回 校長会議あいさつ

R3.1.5 稲垣

慶賀新春。思えば昨年はコロナ禍に翻弄された一年でしたが、今年はワクチンの接種も始まりそうです。令和三年は、是非ともコロナ暗夜の終焉を祝い、改めて「明けましておめでとう」と皆で声高々に祝杯を掲げたいものです。いよいよ三学期の始まりとなります。子どもたちを温かく笑顔で迎えられるように準備をお願いします。またこの三か月は、次の学年への階段を上る大切な時期です。卒業式に関わる指導を機に成長の節目となるような働きかけに努めてください。

本日は、二点についてお話しします。

一点目は、これからの生徒指導体制についてです。昨今、中学校での問題行動が生徒集団全体に影響するようなケースは激減した一方で、小学校の新入学児童では、集団生活の苦手な子どもが増えてきているように思われます。そのため、ここ十年程の間に、低学年の学級経営は格段に難しくなっているようです。通常という言葉がけでは、自分勝手な行動にブレーキがかけられない子どもの対応に追われて、授業が遅れたり、担任が疲弊するケースは、県内多くの市町村で見られるようです。このような現状への対応も含めて、本市では教育アシスタントを配置して授業を補助していますが、各学校でも学級や子どもの特性に合わせたシミュレーションを行い、落ち着いた授業が担保されるような体制を整えておくことが不可欠です。言うまでもなく、学校において子どもたちの学ぶ権利は、最優先されなくてはならないのです。

二点目は、教育の本分にかかわることです。昨年秋頃の新聞報道で、岐阜県に不登校対応の特例校が開設されることになったという記事がありました。不登校児童生徒の新たな学びの場として期待される場所です。そこで少し気になったのが、学校創設のコンセプトとして掲げられた「あなたに学校が合わせる」という文言です。不登校の子どもが少しでも通いやすいように、学級編成から日課やカリキュラムまで、負担軽減のためにあらゆる配慮をしていく方針に異論はありません。本市のあゆみ学級も同じような考え方に基づいています。しかしながら「あなたに学校が合わせる」という表現が独り歩きすると、子どもたちには何らの自己変容が要求されることはないという誤解を生みそうで心配になります。教育とは本来、被教育者を公民として社会的自立に向けて変容させていくために行われます。その本分がおざなりにされたまま、受け皿のシステムのみが、多様性の旗印のもとに社会全体に普遍化していくことに、一抹の不安を感じてしまいます。

昨今、教育を経済行為として産業化していく傾向が見られます。子どもの成長を社会全体で担う姿勢は素晴らしいものですが、一方で、いたずらに学校教育の不安を煽るなど、公教育以外の需要を増加させるための行き過ぎた宣伝が目につくこともあります。私たち大人は、目前の子どもたちの姿と教育の現状を正確に捉えた上で、教育の価値を見据えた方向性を模索していく必要があるように思います。